郷土史への扉

薩摩藩の財政再建 その❶

現在の熊本県にあたる肥後の石工「岩永三五郎」は、江戸時代末期、甲突川の五石橋や国分広瀬の小村新田護岸、福山の地頭仮屋跡（旧福山小学校）の石垣など、薩摩藩内の石造構築物を多く手掛けました。その薩摩藩は当時、深刻な財政難に苦しんでいました。多額の費用がかかる土木事業をなぜ行うことができたのでしょうか。

それは「薩摩藩の天保の改革」といわれた財政再建改革で捻出した資金のおかげでした。今回から2回にわたり、その資金にまつわる型破りな財政再建について紹介します。

一、薩摩藩の財政難の実情

薩摩藩の石高は77万石といわれ、加賀藩102万石に次ぐ第二の大藩でした。しかし他藩に比べ地域性や身分構成に欠陥があり、江戸時代当初から財政難に苦しんできました。その要因は次のとおりです。

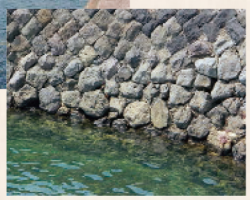
①武士の割合がおよそ25％と非常に多かった（他藩の平均は5％ほど）。

②薩摩藩の石高77万石は籾高であり、玄米高にすればおよそ半分の36万石程度だった。

③幕府が諸大名に命じた御手伝普請の費用は石高に比例したため、薩摩藩は莫大な負担を強いられた。特に宝暦四（一七五四）年から始まった「木曽三川治水工事」は90余名の死者と40万両もの費用がかかり、藩財政に致命傷を与えた。

④藩内は生産性の低い火山灰土壌（シラス）に広く覆われており、やせた土地が多く、稲作や野菜の生産に適した土地が少なかった。

⑤台風や火山噴火、土砂崩れなどの自然災害が多く、特に霧島山噴火、桜島噴火の火山灰によって多大な被害があった。



当時の面影を残す小村新田水門。国分広瀬の国分隼人クリーンセンター南側堤防にある

（防波堤の拡大）

⑥徳川将軍家や公家との婚姻に際し、多額な出費を要した。特に、享保十四（一七二九）年、藩主継豊への将軍家養女である竹姫の輿入れでは、御守殿（竹姫の住まい）の造営から豪華な婚礼儀式、200人もの女中を抱えた。竹姫の一年間の生活費だけでも5000両余りを要した。

二、薩摩藩の負債の推移

薩摩藩の慢性的な財政赤字は、江戸時代初期から始まり、元和二（一六一六）年には2万両、治水工事の始まる宝暦四年には66万両となっていました。その後も、安永の桜島噴火（一七七九年）による田畑の損壊や数度の江戸藩邸火災などが重なります。代々の家老たちも改革や倹約令を試みたものの、藩の負債は増加の一途をたどりました。さらに、天明八（一七八八）年の京都大火で御所が炎上、藩邸も類焼。御所造営料20万両の上納を命ぜられるなど、宝暦の治水工事から約80年たった文政十二（一八二九）年にはついに500万両に達しました。

薩摩藩の負債の推移は次の通りです。

元和　二（一六一六）年	2万両
寛永　九（一六三二）年	14万両
寛永十七（一六四〇）年	38万両
寛延　二（一七四九）年	56万両
宝暦　四（一七五四）年	66万両
享和　元（一八〇一）年	117万両
文化　四（一八〇七）年	126万両
文政十二（一八二九）年	500万両

当時の薩摩藩の500万両の負債は利息だけで年80万両を超えています。薩摩藩の年収が12～14万両であったことを考慮すると実質的には返済不可能であり、破産状態に陥っていました。

そこで薩摩藩第8代藩主島津重豪は、唐物貿易で成功した調所広郷の手腕に注目。下級藩士でありながら財政改革の担当に大抜擢しました。天保元（一八三〇）年十二月には、三カ条から成る注1朱印状を与え、財政再建の全権を任せます。朱印状の内容は次の通りです。

①十年間で50万両の積立金をつくること。

②その外に平時ならびに非常時の手当て（予備金）も蓄えること。

③古い借証文を取り返すこと。

調所による財政再建のてん末と藩のその後については、次回紹介します。

（文責＝鈴）

注1：朱印を押した公文書